═巻頭文═

「共生」から生まれる持続可能性

田邉　昌彦

広島県総務局 経営戦略審議官

仕事の議論はするものの、とりとめもない話、おしゃべりをする機会は少ない。こう感じているのは、私だけではないと思う。

「福祉を語る会」というグループがある。様々な分野で、福祉、とりわけ障害者福祉に関わっている方々の集まりである。福祉施設や福祉団体の関係者もおられれば、家族の障害と向き合っている方もおられる。私を含め公務員もいる。

このグループのメンバーが、年に3～4回，毎回30人程度集まって「話す」。これが「語る会」の主な活動である。話して何の成果が挙がるかを問うことはしない。思い思いに2人、3人で、また4人や6人の輪を作って、ただ日頃の想いを話す。入るも出るも拒まない会であるから、顔馴染みもいれば、初対面やそれに近い人もいる。話の輪のメンバーも入れ替わる。平日の夜、年齢や立場が異なる男女が、お茶を飲みながら「福祉」という大括りの中で生き生きと話している。

機会があれば県職員の同僚を誘っているが、さっとうち解けて、あちこちで話し込んでいる。

何の仕掛けもないのにどうして盛り上がるのか。確証はないが、思い当たることがある。

一つは、家族同士がその日の出来事をしゃべりあう一家団らんのように、社会で色々な想いを持って活動している人たちには、社会団らんがあってもいいのではないか。

それともう一つ、直接の成果は求めないものの、それぞれの経験や考えを何か生かして欲しいと、お互い託しあっているのではないか。この緩やかな連携が会に集うメンバーにとって魅力になっているのではないかと私は思っている。

「福祉を語る会」には、お世話いただいている主宰者がおられる。広島市中区の料亭「久里川」の森浩昭さんである。森さんは長年、障害者作業所の仕事の受注や製品の販路開拓などについて、企業と作業所の双方にメリットが生まれる「共生型」の連携づくりに取り組み、多くの成果を挙げておられる。作業所には経営の発想が必要であり、そこから共生関係を生み出すことにより持続可能性が生まれる、というのが森さんの信念である。こうした取り組みが評価され、「読売プルデンシャル福祉文化賞大賞」など様々な賞を受賞されている。森さんの活動とその理念は、福祉にとどまらず、広く行政の在り方に多くの示唆を与えるものであることは申し上げるまでもない。特に、社会を支える様々な方々と、いかに持続可能な連携関係を築いていくかが重要な課題であり、今年度もこのことを念頭に職務に取り組みたいと考えている。これが、「福祉を語る会」に参加している方々から私に託された想いの一つであるとも思っている。